

シンポジウム／口承文芸研究と女性―研究史に根ざして

コーデイネーターの立場から

野村 敬子

第一〇九回運営理事会議事録には「二〇〇九年三月七日、女性と口承文芸のテーマをさらに発展させた形で企画したい旨、提案され、運営理事会はこれを了承した」とある。企画者としてはその骨子に「研究史と女性の社会性」をおくことにした。これに関わっては『聴耳草紙』の「大工と鬼六」に顕著な事例がある。思想問題で官憲に捕らわれ獄死した織田秀雄による外国昔話の方言化資料を、金ヶ崎の女性が語った記録として存在させている。時代の拘束と佐々木喜善・柳田国男の時代人としての姿、そこにおける女性とは何か。問わずにはいられない。

昭和の研究史を振り返り、時代に凍結した感のあるテーマを扱っている。この企画には、現代にも通底する女性の問題が浮上することを願ってみた。(補助椅子も出たフロアーから、各々向後の課題を提示して頂いた。)

(a) M・Kアザドフスキーの語り手論をめぐる

荻原眞子氏

時代的拘束は柳田に師事した関敬吾のM・K・アザドフスキー著『ロシアの女語り手』を巡る話に残されている。一九三四年柳田に本著(ドイツ語訳)を示したところ強い拒否反応をみせたと、関は述懐している。その後、関は第二次世界大戦で自分の研究どころではない生活が続く。戦後は柳田門下にGHQ関係の郷土調査、山林調査の仕事が割り当てられる。それが土地解放や山林解放の基礎調査でもあったとされるが、関の山林調査は朝鮮戦争勃発で終了する。皮肉にも関の関心事・ロシアの女語り手研究は戦後も政治力学による時代拘束を受ける。これらの経緯を踏まえて、荻原眞子氏に邦訳のないM・K・アザドフスキーの本書の紹介と時代的意義の抽出をお願いした。

コメンテーターの齋藤君子氏にはアザドフスキーの多岐にわたる活動特質、ロシア昔話論の背景を解説して頂いた。荻原氏からN・O・ヴィノクーロヴァたち農民・民衆文芸家の存在感、昔話語り手の人格発見、女性の共同体位相としての哭き歌、フォークロリズム、解放運動等とアザドフスキーの本書内容が解き明かされた。齋藤氏から当時シベリアに昔話は無いとの報告に抗しての実践であると言葉が添えられた。

(b) 『ペンタメローネ』完訳について

杉山洋子氏

歴史の彼方から新たな波を期待する試みとしてペロロ、アンデルセン、グリム兄弟に先駆けるイタリアの『ペンタメローネ』完訳の杉山洋子氏（関西学院大学名誉教授）にお話し頂いた。同書は高木敏雄によって大正年間に抄訳されたが、平成七年まで（杉山氏・三宅忠明氏）完訳をみなかった。高木の急逝も理由の一つであるが、当時の世界奇書異聞類聚『エプタメロン』と同視し柳田は敬遠、無視している。語り手は異端の老婆ばかりである。語りは饒舌でその言葉は方言で乱暴、悪態に満ちる。明治期、近代教育の子供向けに紹介された「三つのシトロン」「灰かぶり」「長靴猫」などが次々に老婆の悪態にまみれた口舌にのる。聞き手は臨月の公妃、語りの口達者は歪曲した身体の老婆一〇人。薬草を扱い医療行為や産婆をしていた老婆たちが、医師により魔女的に村外れで差別的に扱われていたという杉山氏のジェンダーの指摘は重い意味を持つ。

悪態は言語学的には敬語で、日本古典文献、上方落語、芝居、悪口祭りにみられる事例を、コメンテーターの藤井貞和氏が豊富に指摘され、語りの場と猥雑で高揚した言葉の力、表現力字を再確認させる。渡来語りの概念を変える文献であるが差別用語、方言の翻訳と再話、悪口表現も課題になった。尚、ここで

基本資料としたちくま文庫『ペンタメローネ』上・下（二〇〇五年九月十日発行）は、出版社の事情で断裁されることになり、会場で特別販売も行われた。

(c) 路上の怪異―女が独りで街を歩く時―

戸塚ひろみ氏

従来の民俗学は女性について、自然に根ざす生理や霊性などを研究の基本に据えてきた。この研究史に距離をおき、戸塚ひろみ氏は「世間話のなかの女性」に注目。円タク運転手の話を巡り、話と時代の関わり、怪異の素材となる女性を通して「女性の新たな場として都市」を見出し、そこで「独り歩き」に象徴される女性の変身と社会化を探る。その世間話には自立し変化する異性に対する男性社会の情勢が盛り込まれる次第で、話者の世間に当時の女性シルエツトが濃く滲み出る。

コメンテーターの小池淳一氏は、話の空間に加え時間の意識を指摘。民衆の総意として口承文芸があることに根ざし、超時代的なものと時代的なものを縦糸横糸に準えて、広い世間を伝承化する際の性別、話者の性別への視点を挙げ、全体の締めにもなるコメントをされた。

（のむら・けいこ／國學院大學栃木短期大学）